

第 67 回クラシックを楽しむ会

2019 年 7 月 21 日 (日) 18:00～ (2 時間 50 分、休憩除く)

タイトル：歌劇「カルメン」(ビゼー)

会場等：メトロポリタン歌劇場公演
1987 年 2 月

管弦楽：メトロポリタン歌劇場弦楽団
メトロポリタン歌劇場合唱団
メトロポリタン歌劇場バレエ

指揮：ジェイムズ・レヴァイン

演出：ポール・ミルズ

出演：アグネス・ヴァルツァ (カルメン)
ホセ・カレーラス (ドン・ホセ)
レオーナ・ミッチェル (ミカエラ)
サミュエル・レイミー (エスカミーリョ)
その他



第 4 幕終盤、ホセの懇願を拒否、指輪を引き抜いて投げ返すカルメン



(カルメン)
ヴァルツァ



(ホセ)
カレーラス



(ミカエラ)
ミッチェル



(エスカミーリョ)
レイミー

アグネス・ヴァルツァ(1944 -)

ギリシャのメゾソプラノ歌手。

ホセ・カレーラス(1946 -)

スペインのテノール歌手。

レオーナ・ミッチェル(1949 -)

アメリカのソプラノ歌手。

サミュエル・レイミー(1942 -)

アメリカのバス歌手。

物語のストーリー

舞台は 1820 年頃スペインのセビリア。たばこ工場の女工カルメンが伍長のホセを誘惑して悪の道に引きずり込み最後には悲劇の結末を迎える物語。自由奔放なカルメンは自分の性格を変えず強い意思を貫き通す。

聴きどころ

カルメンの歌うハバネラ「恋は野の鳥」、セギディーリア「セビリアの城壁の近くに」、ジプシーの歌「賑やかな楽の調べ」。エスカミーリョの歌う闘牛士の歌「諸君の乾杯を喜んで受けよう」。ホセの歌う花の歌「お前が投げたこの花は」。ミカエラのアリア「何も恐れるものはない」など新鮮で魅力的な歌。また、前奏曲(トリアドール)、第 2 幕への間奏曲「アルカラの竜騎兵」、第 3 幕への中絶的な「間奏曲」、第 4 幕への間奏曲「アラゴネーズ」はカルメン組曲中の曲としても有名。

第 68 回クラシックを楽しむ会(予告)

タイトル：バレエ「ロメオとジュリエット」(プロコフィエフ)

8 月 18 日(日) 17 時 30 分開場、18 時上映開始

英国ロイヤル・バレエ 2019 年 4 月公演。高田茜(ジュリエット)と平野亮一(ロメオ)両プリンシパルによる夢の競演。振付師ケネス・マクミランは重厚な演劇性で人間心理の明暗を表現。

9 月以降、ベルリン国立歌劇場 2018 年 6 月公演の歌劇「マクベス」、ザルツブルク音楽祭 2018 年 8 月の歌劇「スペードの女王」、ザルツブルク音楽祭 2014 年 8 月の歌劇「ドン・ジョヴァンニ」などを予定。

あらすじ

【時と場所】

1820年頃、スペイン南部アンダルシア地方のセヴィリヤとその近郊

【登場人物】

カルメン (Ms) : 自由奔放に生きるロマの女 (原作ではボヘミア女、ヒタナ、ジプシー)

ドン・ホセ (T) : 竜騎兵 (火器を装備する騎乗兵) の伍長、バスク語を話すナバーラ出身

エスカミーリョ (Br) : セヴィリヤの花形闘牛士

ミカエラ (S) : ホセの許嫁で17歳の孤児、ホセの母とセヴィリヤ近郊で暮らしているほか

第1幕への前奏曲は劇中の旋律による華麗な前半と悲劇を暗示する後半との二部構成。

【第1幕】セヴィリヤのたばこ工場前の広場

兵士たちの詰め所にホセを訪ねてミカエラがやってくる。ホセはまだ来ていないのでまた来るといって帰る。子供たちと一緒に兵士が現れ衛兵の交代がはじまる。

昼休みになり女工たちがタバコ工場から出てくる。女工たちの中で若い男たちに人気のカルメンはハバネラ「恋は野の鳥」を歌って男たちを魅了する。警備中の真面目なドン・ホセだけは彼女に興味を示さない。そこでカルメンはホセの気を引くため黄色いカシーの花を投げつけて去っていく。ミカエラがホセを訪ねてきて、ミカエラとの結婚を勧める彼の母親の手紙を渡して帰る。

仕事に戻った女工たちは工場の中で喧嘩騒ぎを起しカルメンは捕らえられる。士官から護送を命じられたホセにカルメンはセギディーリヤ「セヴィリアの城壁の近くに」を歌って誘惑し紐をゆるめさせて逃げ去る。

【第2幕】セヴィリヤ郊外の居酒屋

間奏曲「アルカラの竜騎兵」。2か月後の夜、カルメンは仲間たちと踊りながらジプシーの歌「響きも鋭く」を歌っている。闘牛士達が現れ、エスカミーリョは闘牛士の歌「諸君の乾杯を喜んで受けよう」を歌ってカルメンに言い寄るがカルメンは今はダメと相手にしない。

ホセはカルメンを逃がした罪で兵卒に格下げされ営倉に入っていた。釈放されて出てきたホセはカルメンに会いに閉店した酒場にやってくる。カルメンは喜び、ホセは彼女からもらった花を手に花の歌「お前が投げたこの花は」を歌って愛を告白する。帰営ラップが鳴り帰ろうとするホセにカルメンはすべてを捨てて自由になろうと誘惑する。誘惑を振り切って帰ろうとしたホセの前に士官が現れ、嫉妬したホセは士官と剣で争う。士官は現れた密輸団一味に縛られ、ホセは仕方なく脱走兵として密輸団に加わる。

【第3幕】深夜の陰しい山中

牧歌的な間奏曲。カルメンの仲間は密輸をして稼いでいる。後悔するホセ。ホセに愛想を尽かしたカルメンは「カルタの歌」を歌って仲間とトランプ占いを始めるが死の運命を悟る。

密輸団一味はホセを見張りに残して出かける。ホセの故郷からミカエラが山を登ってきて、ホセを取り戻す勇気をと神に祈ってアリア「何も恐れるものはない」を歌い、岩陰に隠れる。

カルメンの恋心はすでにエスカミーリョに移っている。エスカミーリョがカルメンに会いにきてホセは恋敵と知る。決闘を挑み殺そうとした時カルメン達が戻って二人を引き離す。エスカミーリョは一味を闘牛に招待して山を降りる。

岩陰に隠れていたミカエラが一味に見つかる。ミカエラからホセの母親が重病だと聞かされたホセはカルメンに未練を残して山を降り故郷に帰る。

【第4幕】セヴィリヤの闘牛場前の広場

間奏曲「アラゴネーズ」。闘牛が開催される日、広場は興奮した群衆で賑わい闘牛士達が入場する。着飾ったカルメンとエスカミーリョが現れ、エスカミーリョは闘牛場に入っていく。広場に残ったカルメンは落ちぶれた姿で現れたホセに会う。やり直そうと言うホセをカルメンは相手にしない。場内から歓声が聞こえ、帰ろうとするカルメンはしつこく食い下がるホセに昔もらった指輪を投げ返す。ホセは激昂してカルメンを刺す。倒れたカルメンの亡骸にホセは身を投げ出し「ああ! カルメン! 俺の愛するカルメン! 」と叫ぶ。

歌劇「カルメン」誕生の経緯

ジョルジュ・ビゼーは劇音楽に才能を発揮し組曲「アルルの女」が好評だった1872年、パリのオペラ・コミック座から歌劇の作曲を依頼された。ビゼーはメリメの中編小説「カルメン」を題材に選り妻の従兄リュドヴィック・アレヴィとアンリ・メイヤックに台本を依頼するとともに作曲を開始。しかし劇場側は題材は公序良俗に反し健全な社交場に相応しくないとして台本の改変を迫る。紆余曲折を経て完成した作品^{*1}は原作をより普遍的にし、1975年3月オペラ・コミック座で初演。その3か月後ビゼーは36歳の若さで急死。しかしその半年後にウィーンで大成功^{*2}を収める。素晴らしい音楽とともに不滅の名作となる。

*1. 歌と歌の間をセリフでつなぐ**オペラ・コミック版**。現在、ユーザー校訂によるアルコア版上演が一般的。

*2. ビゼーの親友**ギロー**がセリフ部分に音符をつけたレチタティーヴォに変更し、バレエを取り入れた**グランド・オペラ版**。

ジョルジュ・ビゼー

ジョルジュ・ビゼー（1838年－1875年）は9歳からパリ音楽院に学び、19歳でローマ賞*を受賞して歌劇に意欲を燃やしたが生前はあまり認められなかった。ピアノの才能はリストを驚嘆・称賛させた。死後「カルメン」の輝かしい成功の結果、歌劇「真珠採り」などが再評価され、未発表だった交響曲ハ長調も広く親しまれている。

* フランス国家の奨学金付留学制度。



ビゼー

プロスペル・メリメと小説「カルメン」

プロスペル・メリメ（1803年－1870年）は、フランスの作家、歴史家、考古学者、官吏。パリのブルジョワ出で法学を修めて弁護士・官吏になり、フランスの歴史記念物監督官として、オランジュ古代劇場を含む多くの歴史的建造物を修復・保護。ナポレオン3世の側近、元老院議員として出世。

小説「カルメン」は、1830年27歳で最初のスペイン旅行中の見聞と、旅行中に知り合って「手厚い歓待」を受けたティエバ伯爵夫人（後のモンティホ伯爵夫人）から聞いた話などが材料。なお、彼女の次女ウジェニーは第2帝政の皇帝ナポレオン3世の妃になったが、メリメと共に伯爵夫人と「交流」のあったアレクサンドル・デュマ・フィス等がこれをバックアップした。



メリメ

「カルメン」の花

歌劇のカルメンは**赤いバラの花**をホセに投げつける。しかし原作も、歌劇の台本もバラではなく**黄色いカシーの花**（日本語：金合歓、キングウカン、フランス語：カシー、英語：スイート・アカシヤ※1）。ミモザ※2に似た強い香りの小さな丸い黄色の花。メリメがなぜこの花を用いたのかは永井典克の「メリメ作品中の花」が詳しい。原作執筆(1845年)当時バラ※3はまだ一般的ではなく品種改良を重ねて大衆化したのは20世紀初頭。情熱的なカルメンと赤いバラのイメージが結びついたのは「カルメン」が次つぎに映画化され普及した影響らしい。

※1. 日本で一般に**アカシア**と呼ばれているものは正しくは**ニセアカシア**で白蝶形の花をつける。アカシアとは全くの別物。また、カシーをカシアと誤記している資料をみかけるが、**カシア**はクスノキ科のインドシナモンでカシーとは全くの別物。

※2. 南仏ミモザ祭りの**ミモザ**は**フサアカシア**の俗称、生け花に使う**ミモザ**は**ギンヨウアカシア**の俗称。なお、ミモザの原義は**オジキソウ**属の総称で花はピンク色。

※3. ナポレオン1世の皇后ジョゼフィーヌはバラを愛好し、世界中からバラを取り寄せマルメゾン城のばら園に植栽させる一方、ルドゥーテに「バラ図譜」を描かせた。「バラ図譜」には169種のバラが精密に描かれ、芸術的価値だけではなく植物学上も重要な資料となっている。



カシーの花、右の黒いのは実



「ばら図譜」に描かれたばらの絵